

十字架にかかるた時、ペトロをはじめ弟子たちは皆、イエスさまを見捨てたのでした。そのイエスさまが復活されたのです。弟子たちからすれば、「会わす顔がない」といひだつたのではなかつたでしようか。けれども、恥じる心よりも、イエスさまの復活を喜ぶ思いの方が勝ちました。イエスさ



隠退教師 延藤好英

「イエスはある所で祈つておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、『主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください』と言つた。」

(ルカによる福音書十一章一節)

イエス・キリストの復活おめでとうございます。しかし振り返つてみると、

神さまはわたしたちと心を通わせることを望んでおられます。祈りへの招きです。今日の聖書箇所は、イエスさまが弟子たちに「主の祈り」を教えてくださつた場面です。まずイエスさまが祈つておられました。弟子たちはイエスさまの祈りを見て、

自分たちとは違うものを感じたのではないでしようか。祈る前と後で、イエスさまの輝きが変わつてゐる、そんな驚きを感じた

「イエスマッセージ」

東中国教区ニュース

東中国教区ニュース委員会
〒770-0002
倉敷市鶴形二丁目
倉敷キリスト教会館内
TEL(086)432-11780

目次

- 「イエスマッセージ」
- 「第二回宣教會議報告」
- 「青年の集い」
- 「お聞かせください、地区の声」
- 「二・一平和集会報告」
- 「教師研修会報告」
- 「握手礼式報告・退任の挨拶」
- 「礼拝音樂の集い・編集後記」



憩いの家レモンハウス

「第一回宣教会議報告」

東中国教区副議長 中井大介

第二回宣教会議が去る一月三日（月）オンラインで開催されました。主たる議題は①各部各地区報告、②教区将来宣教について、③次年度予算検討における懇談でしたが、今回は主として「②教区将来宣教について」で取り扱われた協議の内容を中心に報告いたします。

教区総会においては当該議案において「宣教研究を担う部署の設置」が課題に挙げられています。現在の教区機構には、この機能を担う部署はありません。第七十一回教区総会以来、構成メンバーが教区の地区長からなる教会強化特別資金運用特設委員会が稼働はじめ、現在は小岩輝委員長のもと定期的な委員会開催によって教区に各地区の詳細な宣教状況が共有されるようになりました。小岩委員長はそこで、各教会や各地区には個別の課題がありつも、それらを個別に解決していくだけではなく、それらを総合してもっと大きな課題として捉えていく必要性があると語られま

した。折しも教区内の地区長が互いのつながりと理解を深めるうちに、これらの課題を背負う私たちは、何をしているのか？」が問われ、やがて、私たちは折りが良くても悪くとも「主を宣べ伝える」者である、との認識を再発見していきます。地域の人々に、どうやって主を宣べ伝えるのかを自らが明確に認識すべきであり、私たちがノンクリスチヤンである地域の方々からどのように見られているかも知るべきではないだろうか、との問題提起がなされました。

教団においても、教区・教会においても、自分自身の活動の存続が不安の第一要素となってしまい、どうしても内向きな議論にとどまってしまっている現状があります。それと同時に、教会の外の世界には、この混沌とした時代においてキリスト教信仰に興味をもち、期待をし、同時に存在感の薄さゆえに歯がゆさや諦めや無力さを思

う人々の存在があります。私たちは、時代の要請に応えられる社会性を備えられるるだろうか、との問いかけがなされています。こうした語らいの中で、このたびの宣教会議に参加された方々からも、公に喧伝しようと思ったことはなかつたが、ある教會では月に一度は近隣の公園の清掃を行い地域の方々にも教会のご奉仕があると認知されているということや、暮らしに困難をもつ方々の継続的な支援をしたり、同じ苦しみをもつ方々が安心して何でも語り合える場をカフェとして設置したりと、それぞれがキリスト教精神に生きた奉仕をされていることが共有されました。また、歴史を紐解くと、キリスト教が世の人々の信頼を得てきた出来事として、死者を丁重に弔い、ひとりで生きていくことが困難な人々への援助をいつも行つてきました。キリスト教会は、いつでも、誰であつても受け入れてきた、歓迎してきた、手当してきたといった実績があるから、ノンクリスチヤンの多い世界においても信頼されてきたというのです。さらにいえば、その信頼は陰日向に「主が宣べ伝えられ」ていたから醸成されたものに他ならないのです。



す。そこから敷衍すれば、現代においても、私たちは仮に特別な奉仕ができなくて、教会や礼拝堂がいつも開放されており、いつでも誰かの居場所になれるという姿勢をつくり続けていくことも大切な奉仕と見做せるのです。会議の中で玉島教会の高津先生は「大きな目論見として戦争を止めたい。戦争を止めるヒントが教会にはある」と断言されました。戦争を止めるという世紀の事業の探求を、私たちは常に信仰の旅路において深掘りし続けなくてはならないのです、現代においては特に。鳥取県と岡山県にまたがる教区の教会につながる私たちは、人が来るまで待ち続けているではないのです。ひとつの喻えとして、あるところに鐘の鳴る教会があるとします。この教会では毎日決まった時間に鐘が鳴り響きます。教会の鐘は、教会がある限り鳴り響きますが、地域においてこの鐘の音を聞く人は鐘の鳴る教会に意識を集中して聞くわけではありません。しかし、自分たちの暮らしの中に鐘の音が響き渡るとき、今日も教会から鐘の音が聞こえてくる、何とは無しに聞こえてくる、教会の存在は意識にのぼらなくとも日常に確実に

染み渡っており、そこに平和の源泉がある。確かに教会は今日も私たちの暮らしの一部にあり、そこでは神の愛について真剣に語り合われ、愛の業の実践に勤しむ人々が集まっています。それが私たちです。

東中国教区には、語らい合えるつながりがある、ということを教会強化特別資金特設委員会の方々が再発見しました。また、常置委員会においても宣教部委員会の始動が進められ、宣教部（教育・社会・伝道）の各委員長と、オブザーバーとしての教師部委員長・財務部委員長による会議が行われるようになり、教区機構を横断した情報共有の場が育ちつつあります。いみじくも宣教部委員会は「つぶやき広場」とあだ名され、課題の共有がなされ、つながりの豊かな一側面を担いはじめています。東中国教区は、こうしたつながりを基として、宣教の使命を確認していきたいと願うのです。日頃固く閉じた心も柔らかくなつて、自然と一体になるといろいろなことが起きるのです。臼井崇来人さんの海外での想像も出来ない経験や森本潤太さんの森での語らいなど、大好評に付き第二回を五月三日（金）～三一日（土）に開催予定です。募集対象は十八歳～四十年代の方、ふるつてご参加下さい。（〆切りは五月十九日（月）です。）

「青年の集い」

宣教部教育委員会 三浦きょうこ

宣教部教育委員会では、三月三日（月）～四日（火）、八月より延期となつていた「青年の集い」を内容は変えず、新庄村で行いました。当初雨模様でしたが（時に雪）散策時は雨も降らず、残雪の中散歩を楽しみました。テーマの中心はもちろん神様ですが、それを語つてくれるのは「自然」です。日頃固く閉じた心も柔らかくなつて、自然と一体になるといろいろなことが起きるのです。臼井崇来人さんの海外での想像も出来ない経験や森本潤太さんの森での語らいなど、大好評に付き第二回を五月三日（金）～三一日（土）に開催予定です。募集対象は十八歳～四十年代の方、ふるつてご参加下さい。（〆切りは五月十九日（月）です。）

が確信した真理を明確に、言葉と行いとによって宣べ伝えていきたいと思えるような教区形成の機運が育ちつつあります。

お聞かせください、地図の声・・・

今回も「毎日喫茶店」でやー。

岡山県西部地区長
高津俊

教区内諸教会の皆様にはお祈りに覚えて
くださりご声援をいただき感謝しております
す。皆様の地区においても困難な時代を耐
え忍んでおられることを思います。

岡山県西部地区には六つの教会があり、二〇二五年三月現在、牧師三人（うち二人

井原、高屋、笠岡の三教会が無牧師であり、玉島教会の牧師二人がそれぞれ代務を担っています。鴨方教会はマビ・マカリオイ教会の牧師が兼務しています。各教会の礼拝出席者数は一桁が多くても十数人の規模で、減少傾向は止まりません。各教会がそれぞれ牧師を招聘することはもはや難しく、貯えから費用を捻出できる年限での招

四月、笠岡教会に牧師が着任することを喜びをもつて報告いたします)。

えて今やるべきことは、地区内の教会が実際に顔を合わせた交わりを積み重ねることと考えています。牧師が同席できない状態でも主日の礼拝を維持するために導入したオンライン中継に隣席のリアリティを感じるためであり、それぞれの教会のメンバーが現状に直接触れてキリストの体である教会の痛みを自分の痛みとして受け取るためでもあります。実際に会って交流した人同士ならモニター画面越しでも親近感と臨場感を持つことができると考えています。牧師が掛け持ちで午前と午後に地区内の教会を駆け回るにも限度がありますし、復活の記念日である日曜日の朝という意義深い時刻を大切にしたいですから、オンライン中継は大きな助けとなっています。また、会堂の維持管理にも限界がありますので、将来の宣教を見据えた財務計画を検討することにも目を向けなければならぬでしょう。

しかしそれでも、人間の思いを超える御計画に希望を抱き、小さくとも堅実な歩みを進めることにも励みたいと思います。将来について悲観的になつて諦めるのではなくて、オンライン中継に隣席のリアリティを感じるためであり、それぞれの教会のメンバーが現状に直接触れてキリストの体である教会の痛みを自分の痛みとして受け取るためでもあります。実際に会って交流した人同士ならモニター画面越しでも親近感と臨場感を持つことができると考えています。牧師が掛け持ちで午前と午後に地区内の教会を駆け回るにも限度がありますし、復活の記念日である日曜日の朝という意義深い時刻を大切にしたいですから、オンライン中継は大きな助けとなっています。また、会堂の維持管理にも限界がありますので、将来の宣教を見据えた財務計画を検討することにも目を向けなければならぬでしょう。

しかしそれでも、人間の思いを超える御計画に希望を抱き、小さくとも堅実な歩みを進めることにも励みたいと思います。将来について悲観的になつて諦めるのではなくて、オンライン中継に隣席のリアリティを感じるためであり、それぞれの教会のメンバーが現状に直接触れてキリストの体である教会の痛みを自分の痛みとして受け取るためでもあります。実際に会って交流した人同士ならモニター画面越しでも親近感と臨場感を持つことができると考えています。牧師が掛け持ちで午前と午後に地区内の教会を駆け回るにも限度がありますし、復活の記念日である日曜日の朝という意義深い時刻を大切にしたいですから、オンライン中継は大きな助けとなっています。また、会堂の維持管理にも限界がありますので、将来の宣教を見据えた財務計画を検討することにも目を向けなければならぬでしょ

くて、主の栄光を証しする器として賜物を
教会が持ち寄り活用し、各教会の課題を一
緒に担つて喜びも重荷も分かち合うことを
通して、一つのキリストの体であることを
実感できます。喜ぶものの共に喜び、泣く
ものと共に泣くことの実践のひとつになる
と思います。

二〇二五年度の岡山西部地区は、一堂に
会しての合同礼拝をはじめとして、共同で
行う宣教の実践を模索したいと考えていま
す。



ウェブ配信での礼拝中継の様子

「二・一一平和集会報告」

(一九二五年二月十一日、岡山バプテスト教会にて開催)

玉島教会 牧師 高津俊

池住義憲氏を招いて『キリスト者として平和を創る』と題する講演を聴きました。

二〇〇八年に高裁で請求の棄却という判決を受けられました。しかし、その判決文には自衛隊のイラク派兵は憲法違反であると記されたことで画期的な判例となりました。この判決は翌年の岡山における同訴訟の判決でも支持されました。

憲法に拠つて立つとは、憲法に基づいて
政府に対しても私達は交戦権を認めない、と
はつきり言うことであり、それは不斷の努
力で憲法を守つていく私達の義務です。

現在八十歳の池住氏は、あと二十年は生きて伝える意思をお持ちです。もし生きているうちに願っていることが実現しなかつたとしても、次の世代にバトンタッチすればよいとのことです。

う NGO には「あなたにも創れる平和の百箇条、社会を変えられる百箇条」があり、その第一番目に「無力感を克服する」とあるそうです。平和を創るための力を私は持たないからといって行動しない、できないのは無力感に阻まれているからであり、これを克服することから平和創りが始まると い い ま す。

絵画が掲げられていて、描かれていない腕は私達一人ひとりだというのです。平和を創つて生きるとは、キリストの腕として生きることをしながら生きること、キリスト教以外の、仏教もヒンドゥー教もイスラム教も他の宗教も、意味の差異はあるとしても平和を求める願いはある、と結ばれました。

そこで行き着いたのが「ジャストピース」、公正で正義の平和を求めることが、他の者の苦しみの上に成り立つ安定や幸せは「ジャストピース」ではないとのことで

集会に参加した方からは「勇気をもらつた」「元気をいただいた」「平和への熱心な態度に心を動かされた」「自分にもなにができるかもしねー」と好評でした。

機質なものと受け取りがちです。しかし、それは人間の死の数であり、背後に家族・友人・隣人がいます。減った増えたと一喜一憂するものではないと気付かれてからの池住氏はイラク派兵差し止め訴訟にさらに力が入ったそうです。

そこで行き着いたのが「ジャストピース」、公正で正義の平和を求める事と、他の者の苦しみの上に成り立つ安定や幸せは「ジャストピース」ではないとのことです。平和という文字のなりたちを考えても、平は等しいこと、和は穀物を食べる口

集会に参加した方からは「勇気をもらつた」「元気をいただいた」「平和への熱心な態度に心を動かされた」「自分にもなにができるかもしねりない」と好評でした。なお、参加者は会場に四二名、オンラインで参加十五名、合計五七名でした。

【教師研修会報告】

「旧約聖書の知恵と現代」

教師部委員会 委員長 宮本裕子

二〇二五年三月一日（土）午後一時から

三時半まで、「東中国教区教師部主催研修会」が、倉敷教会において開催された。今

年の研修会は、教師と信徒併せて、十一教

会二十名の参加者であった。講師は飯謙先

生（神戸女学院院長）、テーマは「旧約聖

書の知恵と現代」知恵文学のキーワードを

考える」であった。講演は「箴言」「ヨブ記」

「コヘレトの言葉」から、古代ユダヤの「知

恵」とは何かを、知恵文学から解説された。

「一般に古代イスラエルの信仰は、アブ

ラハムへの土地付与の約束、エジプト移住と脱出、荒野の放浪、約束の地への定住という歴史に示された神の導きと、その応答としての律法遵守とまとめられるが、旧約聖書には、その歴史とは無関係に信仰を展開する「知恵」と呼ばれる伝統があった。レジメより。

「ヨブ記」から一例を挙げると、ヨブと三人の友との会話は、最初は一般論で因果応報を語っているが、次第にヨブへの個人攻撃に変わっていく。最後三八章からは、

人が造られた目的は「互いに愛し合うこと」「これを教えるのである。実は「箴言」も「コヘレト」も、最終的には「互いに愛し合う」ことを教えているものである。「隣人愛」を知ることが、「知恵」なのだ、ということである。

飯謙先生の優しい解説、飾らない語り口、ユーモアあふれる話し方に魅了され、更に、長年の聖書研究に基づいた深い洞察から導かれる旧約聖書の「知恵の書」の読み解きは、新鮮で、興味深く、面白く、二時間近くの講演があつという間に感じられるものだった。



の苦労談をお聞きした。活発な質疑応答がなされ、参加した者たちは、旧約知恵文学についての深い学びの時が与えられたことだろう。今回の研修会は、土曜日午後だつたが、次回は平日を開催し、もっと多くの教師たちが参加できることを願っている。最後に、ご参加くださった皆様、奏楽してくださった姉妹、また、茶話会をご準備くださった倉敷教会の皆様にも、心より感謝いたします。





按手礼式の様子

「按手礼式報告・退任の挨拶」

「これからもよろしくお願ひします」

蕃山町教会 牧師 加藤 隆



「とある若さより」

岡山教会 伝道師 佐々木 玲也

岡山県東部地区で三年間ご一緒にしてきた蕃山町教会の加藤隆先生の按手礼式が、十二月二日（月）服部修議長の司式により蕃山町教会で執り行われました。東中国教区を愛して止まないことを公言される加藤先生です。礼拝堂は温かな思いと祈りの靈を感じる、よき緊張感に包まれました。東中国教区を越えての喜びがあることを知らされたことがあります。最前列に着席されていたのは旧知の西東京教区狛江教会の岩田昌路牧師でした。加藤先生によると、道に迷いながら研鑽を積んでおられた神学生時代にご指導下さった方とのこと。一人の牧師の誕生の背後ににあるさらに大きな物語を想いました。

岡山に遣わされて三年過ごしていく中で東中国教区の教会に仕えていく召しが与えられ、神さまの導きによって、これからも教区の教会に仕えるものとしての道が備えられました。感謝です。新年度、新たな教会での働きに喜びと希望をもつて神さまと、またみなさまと共に歩んでまいりたいと願います。



東中国教区「青年の集い」の朝食にて

「退任の挨拶」

「とある若さより」

神学校を卒業

して、右も左もわからぬ状態の自分をあたたかく迎えてください、交わりをもつてくださったこと、心から感謝いたします。様々な集会でご一緒させていただきましたみなさま、ほんとうにありがとうございました。

もつてくださったこと、心から感謝いたします。様々な集会でご一緒させていただきましたみなさま、ほんとうにありがとうございました。

どことは申しませんが、多くのところで若いと持て囃されます。けれども、若いといふのは一つの区別に過ぎません。その人はその人です。分け隔てのないお付き合いが世相的にも求められてきています。とりわけこの教区では年を理由にできなくなつております。

さて、東中国教区では、とかくコロナ禍での赴任であつたために、私にできたことは専ら自らの教会である岡山教会のことだけがありました。ですから、若気の至りばかりでご迷惑をおかけいたしました。お支えいただきましてありがとうございました。

礼拝音楽の集い

(二〇二四年九月十六日(月)、笠岡教会にて
講師に中村証一さんを招いて開催。)

「礼拝音楽の集いに参加して」

旭東教会 古宮久美

私が奏楽者として歩み始めた当初は、ただ大きなオルガンが弾けることや、会堂に響く音が素敵だったこと、献金や前奏後奏を自由に選べるのが楽しかつたりで、礼拝全体のことについて深く考へることもなく、十年以上過ごしました。奏楽は大事な仕事だということはわかつていたつもりですが、とりあえず間違わずに弾くこと、みんなが歌う邪魔をしないように気を付けよう、ぐらいしか考えていませんでした。

今回のような奏楽の学びの場や、奏楽者の心構え、礼拝そのものについてまとまつた形で学ぶ機会はこれまでほんなく、この度、礼拝音楽について、奏楽について、本格的に学べたことは、私にとって本当に大きな収穫でした。

今回聞いたお話をなかで、特に印象的だったのは、奏楽する曲を練習するときは、自分でも何度も歌詞を味わい、歌つてみてから弾かなければならない、ということです。会衆が息継ぎしやすい速さや間を

考え、重要な歌詞の部分をしつかり意識して弾くことで、より会衆に寄り添つた奏楽となるということでした。

私の教会は電子オルガンで、音量を演奏担当の日に、教えていただいたことをさつそく実践してみたところ、牧師から「今日は歌いやすかった! いつもと全然違つた!」と言つていただきました。弾いている本人でも何が違うかわからぬことに、オルガンの弾き方の違いに気づいていただき、むしろ私のほうが驚き、確実な手ごたえを感じました。

中村先生から、「奏楽者をひとことで表すなら、年齢も音楽的能力もバラバラな即席合唱団の指揮者である」と教えていただきました。

私の教会は、年齢はバラバラですが、皆さん音楽的能力も高く、賛美の声量も大きく、時にオルガンが皆さんのが声量に負けそうになることもあるぐらいです。

これからも教会員の皆さんのが賛美を、息と心を合わせ、安心して歌えるようしつかり支えられる奏楽ができるよう、奏楽の腕も磨き、奏楽のこと、賛美についてもつと勉強し、自分自身の信仰を奏楽を通じて深めていきたいと思います。

編集後記

教区内の様々な活動が再開され、こうして誌面でお伝えすることができる喜びを主に感謝いたします。皆様の上に恵みあふれるイースターの時が備えられ、主の復活の喜びで満たされますように (W)



★ハラスメント相談窓口★

毎月第三水曜日 午前九時～午後九時
電話番号 〇九〇一一三三〇一八七三〇
イイミミトハナソウ